さよならぷー兄さん

サーキットランナー

猫は走るよ　くたくたになる絨毯
猫は走るよ　ソファーはもうめちゃくちゃさ
何故そんなに焦っているのか　僕も焦らなきゃ

犬は走るよ　舌を巻き巻きしながら
犬は走るよ　テニスボールが臭くなる
何故そんなに遊びたいのか　僕も遊ばなきゃ

何時か見ていた３３５　手に入れて持って帰ろう
そんな金がないから　僕は情けないのさ

君は走るよ　遅刻しそうに見える
君は走るよ　途中でタクシーを呼ぶ
何故そんなに時間気にする　僕も気にしなきゃ

鳥がさえずるよ　誰かの物まねしをして
鳥がさえずるよ　良く聞きゃ僕の真似だ
何故そんなに聴き分けがいいのか　見習わなくちゃ

いつか見ていたテレキャス　７０年代のいいヤツ
そんなものまで欲しいよ　何でも欲しいよ

猫が走るよ　犬のニオイ気になるらしい
犬が走るよ　君のシュシュを目指し
君は走るよ　二匹の異常な親しみを
鳥はさえずるよ　彼らの実況中継

僕は走るよ　現実逃避するよ
僕は走るよ　現実逃避するよ
僕は走るよ　現実逃避するよ
僕は走るよ　現実逃避するよ
何もしない僕は一番だと言う証明をしてよ

だけど君は怒り狂って　僕の手を掴んでこう言う
「君が欲しいものは何？」　そんなの言えるはずねえ

猫が走るよ　I wanna escape sadline
犬が走るよ　I’m laughing always
鳥が囀るよ　We are singing-in the blues
君が走るよ　僕が走るよ
最初にばてたのは　紛れもなく猫だ

さよならぷー兄さん

道端死んでいる猫
キジトラ焦げ茶のやせた猫
母が泣いて
抱き寄せるよ、穴が開いた猫を

おならをする猫
その名はぷー
三つ年上のやさしい猫で
時折臭いけど

気付いた時に兄さん
押入れその奥に隠れてる
見つかった！　どうしよう？
慌てる兄に僕はわっと笑うよ

おならをする猫
その名はぷー
三つ年上のやさしい猫で
時折臭いけど

外に遊びに行くよ
兄さんを追いかけ威嚇される
それでも僕らは
兄さんの遊ぶところを見たいだけさ

夕方になって兄を呼ぶと
ほら帰ってくる
一人で足を拭いて家に入るよ

おならをする猫
その名はぷー
三つ年上のやさしい猫で
時折臭いけど

一ヶ月帰らぬ兄

サバトラ、うちの猫知りませんか？
僕らは探したよ
夕焼けが青くなるまで

おならをする猫
その名はぷー
三つ年上のやさしい猫で
時折臭いけど

二度とは会えないんだね
結局、オスだもんな

二度と会えない
さよなら、ぷー兄さん

焼肉

ああしゃぶしゃぶなんか　食べたことないけど
網の上でロース豚焼こう
ああすき焼きなんて　食べたら酔うけど
網の上で鶏肉焼こう

ああステーキなんて　半生だから食べられないけど
鉄板の上でジンギスカン焼こう
ああローストビーフなんて　おいしいんだけど
鉄板の上でレバーを焼こう

ああ　歳を気にせずに
バクバクと食べてみたいよな
ああ　ニキビ気にせずに
脂っこい肉を塩を掛けて上品に

バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
（ああ　焼肉が食べたい）

ああサラダ感覚で　野菜を食べても
肉と一緒で愉快なハーモニー
ああキャベツを半生で焼いて
あの微妙なグルーヴを噛め

ああ　歳を気にせずに
バクバクと食べてみたいよな
ああ　次の日気にせずに
胃が臭くなるのも食べたいよな

カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
（ああ　焼肉が食べたい）

肉がだんだんと
食べられない体に
受け付けない体に
成っていくのを感じたその日に
きっと僕は焼肉の舞台から落とされそうなんだ
そんなの嫌だ

ああ　体気にせずに
バクバクと食べてみたいよな
ああ　次の日気にせずに
ありえないぐらい食べてみたいよな

バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
バラロース肉ヒレ
（ああ　焼肉が食べたい）

カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
カルビハラミムネ

カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
カルビハラミムネ
（ああ　焼肉が食べたい）

ああ　焼肉が食べたい
焼肉が食べたい
焼肉が食べたい
焼肉が食べたい

太陽

空気の読めない太陽がいた
乾いている土地のひび割れを見て
「どこまで割れるのか」と思い
自分を照らして乾燥させた

そこに住む僕は「雨を降らして」と
太陽にお願いすると
「僕にまかせて」と言い放っていたのに
元気に輝き始めた

僕は厭きれてしまった
「君は僕を殺したいの？」

太陽は何故僕が怒ったのか
わからないのか少し悩んでる
僕は「もう知らない」と突き放した
太陽は少し驚いたようだった

空気の読めない太陽がいた
海から沸いてくる蒸気を見て
「どこまで沸くのか」と感じて
雨雲を多く作った

そこに住む僕は「雨雲を飛ばして」と
太陽にお願いすると
「僕にまかせて」と言い放っていたのに
逆に台風を呼び起こした

僕は厭きれてしまった
「君の事大嫌いだよ」

太陽は何故僕が怒ったのか
わからないのか少し悩んでる
僕は「もう知らない」と突き放した
太陽は少し驚いたようだった

空気の読めない太陽がいた
「私はいないほうが人のため」と
君がそう言った日から朝が来ていない
まったく空気の読めないやつだ

そこに住む僕は「朝を連れて来てと」
太陽にお願いするけど
「君に嫌われたくない、
だからもう会いたくない」と

どこまで空気の読めないやつだ
僕だけじゃない他の人にも皆
迷惑かけること知っているのか
本当に見捨ててやるぞ

「僕が悪かったと、言えばいいのか」
言い方がもっとあったのかもしれない
あんなに僕は怒っていたが
太陽がいないせいでとても寒い

もう一度触れたい暖かい太陽を
もう一度触れたい暖かい太陽を

ある太陽の日

ある日、ある曜日の、ある夏
昼間街へ繰り出して
何か寂しいなと思う

別に、恋人・友達いなくて
一人で寂しいわけじゃない
別な意味で空虚感

駅前で親父が渋い声出しながら
ブルーズギターかき鳴らして
楽しそうだな

ああ素晴らしい太陽の日
何もかも照らしてさ
暖かく見守ってくれてんだ

ああ素晴らしい太陽の日
皆の辛そうな笑顔が
ああ夏いね　太陽の日
その勢いで僕も笑いたい

ある日、ある曜日の、ある夏
昼間街へ繰り出して
何か辛いなと思う

別に暑い日差しが体調を
悪くさせてるわけじゃない
別な意味でしんどい

駅前で少年がラムネ飲みながら
仲間と何か話しているよ
楽しそうだな

ああ素晴らしい太陽の日

何もかも照らしてさ
暖かく見守ってくれてんだ

ああ素晴らしい太陽の日
皆の可哀想な笑顔が
ああ夏いね　太陽の日
その勢いで僕も笑いたい

DO NOT OPEN THE DOOR!!!

下向きに生きてきた結果
僕は太陽を見失ったよ
ゼロに成る体だったなら
気楽でいいのに

誰にも会わない日々を過ごし
部屋の隅で三角座り
この孤独から
逃げ出せはしまいと　思っていたね

誰かが呼ぶ声
聞こえないフリしてた
空耳のような
綺麗な言葉が嫌い

Do not open the door
何時だってね
死ねばいいと思ってるんだろ？
あんたらいつもさ
偽善ぶってね
部屋の前に
来て僕を呼ぶけれど

そんな誘いにノリはしないのさ
僕は一人で笑えるからね

カビ臭い部屋の隅で
アシダカが僕を見つめてる
こんなに役立たずのクズを
君は見てくれているのかい

死んじゃえばいいんだけれど
ココが楽園だから
外で生きているような

綺麗なヤツは滅びなよ

Do not open THE DOOR!!
何時だってね
哀れんでみているんだろ？
あんたらいつもさ
偽善ぶってね
部屋の前に
来て僕を呼ぶけど

そんな誘いにノリはしないのさ
僕は一人で笑えるからね

親が呼ぶ声　空耳だ　聞こえない　あー
友が呼ぶ声　空耳だ　聞こえない　あー
先生が呼ぶ声　空耳だ　聞こえない　あー
黄色が呼ぶ声　空耳だ　聞こえない　あー

DO NOT OPEN THE DOOR!!!
何時だってね
いい加減にしろと思ってんだろ
あんたらいつもさ
偽善ぶってね
部屋の前に
来て僕を呼ぶけど

DO NOT OPEN THE DOOR!!
どうしようもないじゃん
日に焼けたお前ら
綺麗事しか言わないし
そやって生きてて
恥ずかしくない？
だからそこのお前

僕の手をいい加減離してくれ

その手を離して
その手を離して
ねぇ離してよ
その手を
ねぇ　ねぇ離して

さかなの一日

さかなが爆発した
ゆるい爆発だ
ガスバスガスハツ

僕は紅い実
雲の上
おてもやん

あなた青い実
紙幣の上
コワイコワイ

今日は分解
明日も和解
夜には二酸化炭素になって
青葉に吸われるのは
その次の日である

Blue Tears

青い青い涙の如く降り続ける雨
僕は白いケーキと共に雨宿りをする
大通りのアーケード街の屋根の下
僕らの他には始めから誰もいない
その場で持っていたナイフでケーキの背を
割いて中身をごろごろと取り出して
一人寂しくそれをフォークに刺して食べた
「甘く」て悔しいほどに最悪な味がしてた
静けさに負けて、食べるのをやめない僕を
ケーキは怒ってこう言うよ
「今さら、遅すぎたんだよ
お前がすべて悪いんだよ」

緑緑色に町は染まる
誰もが楽しみにしてたクリスマスイヴ
大通りのアーケード街の屋根の下
雨宿りする人もなく僕は一人でいる
その場で持っていたイチゴジャムをケーキにかけてみようか
白いケーキもこれで食べやすいかな
真っ赤に染まった白いケーキをフォークで刺して食べた
「寒い日」に染みるほどに痛い味がしてた
寒さに負けて、食べるのを止めた僕を
ケーキは怒ってこう言うよ
「今さら、遅すぎたんだよ
お前がすべて悪いんだよ」

ケーキに申し訳がないが
これ以上食べられない
真っ白なケーキを
欲しかったのは僕なのに
文句ばかりつけてごめんね
全部食べられなくてごめんね
全部悪いのは僕だ
だからもう怒んないでね
この場から消えますから

赤い赤いイルミネーション緑の下
僕はもうここには戻らないと思う
大通りのアーケード街の屋根の下
残したケーキに礼を言い僕は屋根から出た
その時赤に染まった僕の手をつかんだのは
どこの誰だろうか、後ろを振り返る
これが良き思い出というやつか　懐かしい顔の人
彼女は泣いてこう言うよ
「今さら、遅すぎたよね
私がすべて悪かったね」
今さら、
そんなの、遅すぎだよ

緑緑色の知らない部屋で
すがすがしい東日を浴びて点滴を外す
隣では白い顔した知らない人
彼女はいそいそとこう言った
「待たせてごめんね」

足音リヴァーブ

「世界は俺を中心に廻る」って
二十歳過ぎても信じる君が
僕のこと否定するのもわかるが
君の"正義”のため 最近聞こえる音がある

そう　気がつけば 君の周りには誰もいない
最果てから　響いてるかのような足音が響く

「俺のいう事がきけないのか？
だから俺は君を許せない
俺が”正義”でお前は”悪”だ」
別にそれでもいいけど よくごらん周りの景色を

僕以外の　誰が君の側にさ
立っているだろう？ 聞こえないのかい この足音が

僕は君の栄光を知らないというだろう
だから最後に聞かせよう絶望の足音リヴァーブ

そう　気がつけば 君の周りには誰もいない
最果てから　響いてるかのような足音が響く

「じゃぁ」 とつぶやき　僕も彼らのようにして
君の元に足音リヴァーブを置いて行くよ

朝七時のSunshine of love

朝六時に起きる
太陽はまだ昇らない
暗い布団の中で
私は瞬きをする

愛する人よ
夜明け前の青い一時から
Break out
するために起きなさい

卵を割って
火をつけろ
何もできない時間だけれど
目玉焼きぐらいなら焼けるから

半時後も君は
まだまだ目を覚まさない
「できたよ」とごはんを
盛り付けて溜息をつく

愛する人よ
この空腹な一時から
Break out
するために起きなさい

朝七時のSunshineを
愛している
だから早くしないと
何もできない一日になってしまうよ

Sunshine of your love を
聞き流して
何もできない時間だけれども
「君はできる」と励ますよ

雨が降っても
愛してる
風が吹いていても
愛している

いつも私に
新しい愛
伝えるために

朝七時のSunshineを
愛してる
だから起きてね彼が来るまで
ご飯を食べて準備してね

時は迫る
早くして
何もできない一日になっても
私は君に何もできない

花火の楽しさ

僕の家にはたくさんの花火があった
僕は毎日夜になると、ひとりで花火をしていた
ずっとずっと、ずっと夜明けまで

僕が花火に火をつけると、だいたい小さく咲いた
乾燥し過ぎてだらしがないのだ
たまに状態のいいものがあって、どわっときれいに咲いてくれる
けれどもすぐに消える

たまに人がくると一緒に花火をした
人がいると状態のいいものが多く見つかり
僕たちは長い間花火をたのしむ
五分咲きの花火をずっとずっと

けれどその人は夜中に帰ってしまった
その後もしばらく状態のいいもので楽しんだが
またいつものだらしがないものばかり掴む
きれいな花火を見たくて、僕は火をつけ続ける
ずっとずっと、ずっとひとりで

夜明け前に打ち上げ花火に火をつけたが、点火しなかった
くすぶったのかもしれないと、今日の夜また火をつけることにして寝た
しかし、僕がやっと寝始めたころに花火が上がった
明るくて良く見えなかったが、きれいな色をしていた
大きな大きなたんぽぽの花のようだった
今日は誰かが来てくれる気がした
その誰かと花火に、大きな花火に
火をつけたいな